

# 再帰代名詞と中間態構文

時崎 久夫

札幌大学

## 1. はじめに

中間態構文については、これまでNP移動による分析(e.g. Keyser and Roeper 1984, Stroik 1992, Fujita 1994)や語彙規則による分析(e.g. Roberts 1987, Fagan 1988, Ackema and Schoorlemmer 1995)などが論じられてきたが、まだ問題が残されている。本稿では、Chomsky (1995)の言うMergeと空の再帰代名詞による分析を提案する。

以下、第2節ではこれまでの分析の概略と問題点を示す。第3節では本稿の分析を提案し、第4節ではこの分析の帰結について論じる。\*

## 2. これまでの分析の問題点

### 2.1 NP移動分析

ではまずこれまでの主な中間態構文の分析とその問題点を見ておこう。

- (1) This book sells *t* well

これは目的語のthis bookを主語位置へNP移動させる分析を示している。しかしこの受動態と同じ移動を用いる分析では、受動態(2a)と中間態(2b)の違いを説明できない。

- (2) a. The city was destroyed (by the enemy).  
b. Cognitive science sells well (\*by clever linguists).

すなわち、(2a)の下線部の受動形態素が中間態(2b)では現れないこと、また任意の動作主を表すby句が中間態(2b)では現れないということである。さらに、前置詞残留も、受動態(3a)では可能であるが、中間態(3b)では容認不可能となる。

- (3) a. John was laughed at.  
b.?\*John laughs at easily. (cf. Keyser and Roeper 1984: 400, Fagan 1988: 194)

## 2.2 語彙規則分析

語彙規則による分析では、例えば(4)のように、動作主である外項をsuppressし、代わりにthemeである内項を外項化するという項構造の変更を行う。

(4) V: [ $\theta_{agent}$ ,  $\theta_{theme}$ ] ---> [ $\{\theta_{agent}\}$ ,  $\theta_{theme}$ ] (Roberts 1987: 189, cf. Fagan 1988: 198)

これにより、中間態構文は基底生成されるため、NP移動分析のような受動形態素の問題はなくなる。しかし結果構文の中間態(5a)でもtraceは存在しないことになり、主語のnew seedlingsがflatと直接、叙述(predication)関係にあるとしなければならない。

(5) a. New seedlings water (t) flat easily.

b. \*Those teenagers laughed sick. (Carrier and Randall 1992: 191)

しかし、この叙述関係は(5b)に示すように一般に主語とは不可能であり、(5a)でも目的語位置に主語と同一指示の空範疇があると考えなければ説明できない。また(6a)のように自動詞も結果構文をとり、そこから中間態(6b)を作ることが可能である。

(6) a. He drove 50 tires bald.

b. Go buy some cheap tires for that scene, those inexpensive tires drive bald really quickly. (Goldberg 1991: 72, cf. Ackema and Schoorlemmer 1995: 186)

(4)のような規則は他動詞の目的語を主語にする語彙的な操作であるから、自動詞にはそもそも適用できず、(6b)のような例を説明できない。

以上見てきたようにNP移動分析と語彙規則分析にはそれぞれ問題が残っている。これらの問題がここで提案する分析では生じないということは第4節で述べる。

## 3. Mergeと空の再帰代名詞

### 3.1 空の再帰代名詞

ここでの分析を示すため、まず英語に空の再帰代名詞が存在することを述べる。

(7) a. John washed (himself). [behave, dress, hide, shave, worry, etc.]

b. Snow dissolves (itself) into water.

c. Let (yourself) go and get mad once in a while.

d. He washed ?(himself) clean. (attested)

(7a)はQuirk et al. (1985)がsemi-reflexive verbsと呼んでいるもの、(7b)は無生物主語の場合、(7c)は使役構文、(7d)は結果構文である。これらの例では再帰代名詞が現れても現れなくても基本的な意味は変わらない。よって再帰代名詞が現れない場合には(8)に示すような空の再帰代名詞 (*refl*と表す) を仮定することができると思われる。

(8) John washed *refl*/himself

このような空の再帰代名詞は一見奇異に見えるかもしれない。しかしこの(8)と次の(9)に示す他の言語の例との平行性は、この仮定を支持するものと考えられる。

- (9) a. George wast zich/zichzelf.  
George washes refl /refl-self
- b. Max wäscht sich/sich selbst.  
Max washes refl /refl self

例えば(9a)のオランダ語と(9b)のドイツ語では、再帰代名詞に弱形(zich, sich)と強形(zichzelf, sich selbst)の2種類がある。英語のoneselfは形態としてはoneとselfの複合形であり、強形の再帰代名詞と考えられる。しかしzichやsichのような弱形の再帰代名詞は英語には存在しないので、音形のない空の再帰代名詞がそれに相当すると考えられる。そうすると、英語においても(7)のような例で弱形と強形の再帰代名詞が現れると言うことができ、(9)のような他の言語の例と一般化することができる。

また(10)のような例には、空の代名詞 (*pro*と表す) があると考えることができる。

- (10) John steals *pro* for a living. (Hoekstra and Roberts 1993: 188)

よって英語では動詞の目的語に空の代名詞と空の再帰代名詞が生じうると言える。

さらにまた、英語の歴史を考えてみても、最初は代名詞をそのまま再帰用法にも使っていたのが、同じという意味の-selfをつけて用いられるようになり、さらに(7a)のwashなどでは目的語が落ちるようになったという事実がある。これは英語では、zich, sichのような弱形の再帰代名詞が現れなかったため、大きすぎる-self形の再帰代名詞を省略するようになったものと考えられる。

### 3.2 中間態構文における再帰代名詞

さて次に空の再帰代名詞が中間態構文にも存在するということを述べる。第1の論拠は他の言語との平行性によるものである。例えば(11a)のドイツ語ではsich、(11b)のフランス語ではseという、弱形の再帰代名詞が中間態構文に現れている。

- (11) a. Das Buch verkauft sich gut.  
this book sells refl well
- b. Ce livre se lit rapidement.  
this book refl reads rapidly

Massam (1992)もロマンス言語の中間態に再帰代名詞が現れることを指摘しているが、実際には(11a)のようにゲルマン系のドイツ語にも現れ、スラブ系のロシア語でも動詞の接辞として現れる。<sup>1</sup> またJespersen (1927: 351)もフランス語やドイツ語との類似に注目して、英語ではself形がclumsyであるから再帰形は使われないのだ (... and we are reminded of the disinclination in English to use the reflexive turn because of the clumsiness of the self-forms.) と述べている。

中間態に空の再帰代名詞が存在するとする第2の論拠は、(12)のような例である。

- (12) a. This book sells itself.
- b. This meat cuts itself. (cf. Fellbaum 1989, Levin 1993: 84)

Massam (1992)も指摘しているが、(12)では目的語の位置に実際に再帰代名詞のitself

が現れている。そしてこれらの文は普通の間態と基本的には同じ意味を持っている。この(12)の構文の再帰代名詞は音調の核を持つのが特徴であり、強形の再帰代名詞の性格を持っていると言える。よって普通の間態構文には弱形に相当する空の再帰代名詞が存在するというここでの分析を支持するものとする。

これに対して(12)の再帰代名詞は目的語ではなく、副詞ではないかという反論が予想される(cf. Fiengo (1980: 54), 今泉 (1997))。しかし、この再帰代名詞が副詞でないという証拠が2つある。1つは副詞のように位置を変えられないことである。

- (13) a. Mary has come to recognize this herself.
- b. Mary herself has come to recognize this.

(13a)の強意の副詞herselfは(13b)のように主語の直後に置いても意味は変わらない。しかし(12a)で(14)のように再帰代名詞を主語の後ろに置くと意味が変わってしまう。

- (14) This book itself sells. (But its cassette doesn't.)

(12a)は「売れる(ので宣伝もいらない)」というのに対し、(14)では例えばカセットテープ付きの本などで「本自体は売れる(が、付属のカセットは売れない)」という意味になる。よって(12)の再帰代名詞は強意の副詞ではないと言える。第2に、(15)に示すように副詞hereを付け加えてみると、再帰代名詞が動詞の直後にきている(15a)はOKであるが、間にhereが入っている(15b)は非文となる。

- (15) a. This book sells itself here.
- b. \*This book sells here itself.

よって格の隣接性の条件が適用していると考えられ、(12)の再帰代名詞は動詞の目的語であると言える。またLevin (1993: 84)も(12)の再帰代名詞をvirtual reflexiveと呼び、動詞の目的語と考えている。

以上のことから、(12)のような再帰中間態はovertな再帰代名詞を目的語とする構文であり、さらにこのことは普通の間態構文が空の再帰代名詞を目的語としてとっているというここでの分析を支持するものとする。

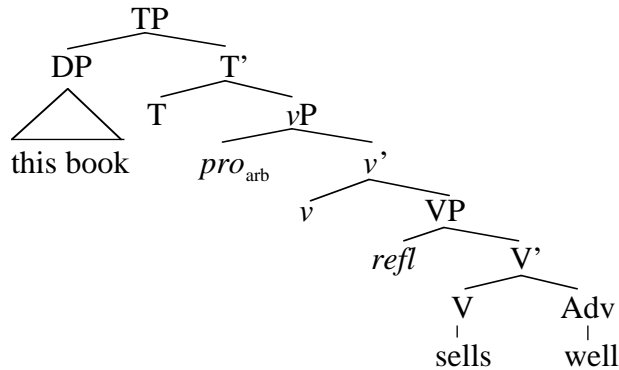
### 3.3 中間態構文の構造

今度は中間態構文の主語について考えたい。まず主語の3つの機能を見てみよう。

- (16) a. My mother (top/subj/ag) gave me these beads.
- b. These beads (top) I (subj) was given by my mother (ag). (Halliday 1970: 159)

(16a)でmy motherは話題、文法的主語、動作主という3つの機能を同時に果たしており、(16b)ではthese beadsが話題、Iが文法的主語、my motherが動作主というようにそれぞれの機能が3つの要素に分散しているというのがHallidayの考えである。このことを中間態構文に当てはめると、(17)のように、文法的主語は話題の機能も果たすが、動作主の機能は任意指示の $pro_{arb}$ が果たしていると言えよう。

(17) [TP this book (top/subj) [vP *pro*<sub>arb</sub> (ag) [vP *refl*<sub>this book</sub> sells well]]]



ここで主語のthis bookはMergeによって[Spec, T]に導入され、*refl*の先行詞になっていると考える。動詞sellは*pro*<sub>arb</sub>にagentのθ役割を、*refl*にthemeのθ役割を与える。[Spec, T]のthis bookは、themeの*refl*と同一指示であることにより、間接的にthemeのθ役割を与えられると考える。<sup>2</sup> この点で、中間態は(18)の左方転位構文と似ている。

(18) This book (top), they (subj/ag) sell it well.

(18)でも話題の名詞句は、目的語の代名詞によって間接的にthemeと解釈されると思われる。そして中間態(17)と左方転位(18)との違いは、中間態では話題の名詞句自体が文法的な主語になっており、動作主の*pro*<sub>arb</sub>が主語位置に現れない点である。直観的には、中間態構文は左方転位構文をコンパクトにTP内にまとめたものとも言えよう。

(17)では*refl*の統率範疇をTPと考えているが、ここで*refl*の先行詞がなぜ*pro*<sub>arb</sub>にならないのかという問題がある。これには3つの解決法があると思われる。1つはHoekstra and Roberts (1993)のように、このような*pro*<sub>arb</sub>はbindingやcontrolなどの関係に入らないとすることである。2つめの方法は、(19)のように、Stroik (1992)に従ってagentはPRO<sub>arb</sub>であって、VP付加位置、つまりA-bar位置にあるとすることである。

(19) [TP this book (top/subj) [vP [vP *refl*<sub>this book</sub> sells well] PRO<sub>arb</sub>(ag)]]

bindingはA位置の要素について言うものであるから、*refl*がPRO<sub>arb</sub>にA-bindされることはない。第3の方法は次のような説明である。仮に*refl*が*pro*<sub>arb</sub>にbindされたとすると、bind関係により、*refl*もarbitraryな指示となる。そうすると[Spec, T]のthis bookはこの*refl*<sub>arb</sub>と同一指示ではあり得なくなり、結果としてthis bookは何の意味役割も与えられなくなってしまう。これはθ基準の違反であり、意味解釈上問題となるので、従ってこの*pro*<sub>arb</sub>が*refl*をbindするという解釈は成立しないと思われる。ここではいずれかの方法でbindingの問題は解決できると考え、(17)を中間態の構造とする。

さて、中間態構文と左方転位構文の類似性はフランス語の例にも見られる。

(20) a. ?Les taudis se démolissent.  
the hovels refl demolish(3pl)

b. Les taudis, ça se démolit.  
the hovels that refl demolish(3sg)

(Jones 1996: 116-117)

(20a)はいわゆる中間態にあたる構文であるが、(20a)はやや不自然で、(20b)のように話題の名詞句をçaで受けるようにすると容認度が上がる。(20b)ではles taudisという名詞句をTPの左に置いて話題であることを明示することにより、les taudis自体がagentだと誤って解釈される可能性を少なくしているものと思われる。

この点で英語はもう少し自由だと言える。(21)の文は(22)の3つの解釈を持つ。

(21) Children don't wash easily.

(22) a. Children find it difficult to wash things.

b. Children find it difficult to wash themselves.

c. It is difficult to wash children.

(Halliday 1967: 49)

そしてこれらの解釈は、ここでの分析によって次のように正しく示すことができる。

(23) a. [TP e (top/subj) [VP children (ag) [VP pro<sub>things</sub> wash easily]]]

b. [TP e (top/subj) [VP children (ag) [VP refl<sub>children</sub> wash easily]]]

c. [TP children (top/subj) [VP pro<sub>arb</sub> (ag) [VP refl<sub>children</sub> wash easily]]]

(23a), (23b)ではchildrenは動作主のθを与えられる[Spec, v]から[Spec, T]に移動してTとcheckingを行う。よって(23a), (23b)ではchildrenは動作主、主語、話題の3つの機能を果たすことになる。これに対して中間態の解釈である(23c)ではchildrenは[Spec, T]にMergeされ、話題と文法的な主語になり、pro<sub>arb</sub>が動作主となる。

(24)はこの(21)と平行的なフランス語の例である。

(24) Les enfants, ça se lave en dix minutes.

the children that refl wash(3sg) in ten minutes

'Children wash themselves (each other) / Children can be washed in ten minutes.'

(Ruwet 1976: 91)

ただ(24)では再帰代名詞のseが明示的に現れるために、reflを持つ(23b), (23c)に対応する解釈のみとなり、目的語がproである(23a)に対応する解釈は存在しない。

このように、(21), (24)の例の解釈について、この分析は正しく説明することができる。よってこれらの例はこの分析を支持するものと考えられる。

## 4. この分析の帰結

### 4.1 NP移動は関与しない

以上、中間態構文は(17)の構造を持つということを述べてきたが、今度はこの分析の帰結について考えてみたい。まず第1に、この分析では主語はいわば基底生成し、空の再帰代名詞と解釈によって結びつけるため、目的語NPの主語位置への移動はない。よって2.1節で見たNP移動による分析の問題は生じない。すなわち、中間態構文はここでの分析ではあくまで能動態であるため、受動形態素が存在しないことは当然の帰結である。また動作主を明示的に示すby句が現れないのは、(2b)のようにby句を示した場合、動作主であるpro<sub>arb</sub>と意味的に矛盾するためであると言える。

また例文(3)で見たように、前置詞残留は中間態ではできないが、これは(25)のような前置詞の目的語としての空の再帰詞を禁じる制約によるものと考えられる。

(25) *refl* (unlike trace) cannot appear as the complement of a preposition.

ここで述べている空の再帰詞というのは省略現象であり、逆に前置詞はその目的語の文中での意味関係を示すためのものであるから、前置詞を出しておいてその目的語を省略するのは機能的に矛盾する。これが(25)の制約の趣旨である。(25)は前置詞の空の目的語 $pro$ にもあてはまる、より一般的な制約の一部であると思われる。

ここでの分析はさらに、NP移動分析の問題となる(26)の例を説明できる。

(26) Dit vlees heeft/\*is altijd gemakkelijk gesneden.  
this meat has/is always easily cut  
'This meat has always been easy to cut.'

(Ackema and Schoorlemmer 1995: 188)

オランダ語では非能格(unergative)動詞は完了の助動詞として‘have’にあたるものを取り、非対格(unaccusative)動詞は‘be’をとる。そして中間態の(26)では、助動詞は‘be’ではなく‘have’になる。このことは目的語がNP移動する分析では問題となるが、ここでの分析では主語は初めから主語位置にMergeされるので、正しく説明される。

#### 4.2 語彙規則は関与しない

さて、ここでの分析は、NP移動分析の問題だけでなく、語彙規則分析の問題も解決できる。(5)で見たように、語彙規則分析では(5a)の動詞waterの後ろに目的語の要素がないことになり、主語のnew seedlingsと述語flatを直接関係づけられないという問題があった。しかしここでの分析では(27)のように目的語位置に空の再帰代名詞があるので、目的語の $refl$ と述語のflatが叙述(predication)の関係を持つことができる。

(27) New seedlings  $pro_{arb}$  water  $refl_{new\ seedlings}$  flat (easily)

また、(6a)のdriveのような自動詞では、(4)のような他動詞を入力とする語彙規則を適用すること自体ができず、(6b)の中間態を派生できないという問題があった。しかし(28a)に示すように、自動詞も再帰代名詞をとって結果構文を作ることができる。

(28) a. The lecturer talked [herself hoarse]

b. ..., those inexpensive tires  $pro_{arb}$  drive [ $refl_{those\ inexpensive\ tires}$  bald] really quickly

よって(6b)の中間態もここでの分析によって、(28b)のように、空の再帰代名詞をsmall clauseの主語としてとっていると考えることができる。

以上、この分析は、NP移動分析と語彙規則分析の問題を解決できることを述べた。

#### 4.3 中間態構文の状態性

この分析の3番目の利点は、中間態が出来事ではなく、状態を表す構文だという、意味的な特徴を自然に導き出すことができる点である。これはMatsumoto and Fujita (1995)と同じ議論になるが、ここではNP移動を仮定しない点が異なっている。(29)

で中間態は状態動詞と同様に進行相をとれず、状態的な構文であると言える。

- (29) \*Bureaucrats are bribing easily. (Keyser and Roeper 1984: 385)

Diesing (1992)は、出来事を表す一時的述語(stage-level predicate)と状態を表す個体的述語(individual level predicate)は、それぞれ(30a), (30b)の構造を持つとしている。

- (30) a. [<sub>IP</sub> e [<sub>I</sub> I [<sub>VP</sub> NP [<sub>V</sub> V ... ]]]]  
b. [<sub>IP</sub> NP [<sub>I</sub> I [<sub>VP</sub> PRO [<sub>V</sub> V ... ]]]] (Diesing 1992: 24-26)

この考えを現在の枠組みに合わせて、(30b)のIPをTP、VPをvP、V'をVPと読みかえると(31a)の構造となり、これまで述べてきた(31b)の中間態の構造と平行的になる。

- (31) a. [<sub>TP</sub> Firemen [<sub>T</sub> T [<sub>vP</sub> PRO<sub>firemen</sub> [<sub>VP</sub> are altruistic]]]]  
b. [<sub>TP</sub> This book [<sub>T</sub> T [<sub>vP</sub> pro<sub>arb</sub> [<sub>VP</sub> refl<sub>this book</sub> sells well]]]]]

もちろん、状態的な普通の文(31a)と中間態(31b)では、[Spec, T]の名詞句が同一となる相手が、それぞれPROとreflである点が異なっている。しかしどちらの場合も、[Spec, T]の名詞句を話題として、その恒常的な性質をvP内で記述するという点は同じである。逆に言えば、中間態構文では、(31b)で示されるように、[Spec, T]と[Spec, v]にそれぞれ話題の名詞句とpro<sub>arb</sub>という異なる2つの名詞句が入るため、一時的述語の文(30a)で起こるような、[Spec, v]位置から[Spec, T]位置へのNP移動は起こりえない。中間態が状態的であるのはそのためであると考えられる。

#### 4.4 付加詞中間態

4つめの帰結として、付加詞中間態(Adjunct Middle)を考える。まず道具(instrument)が主語となる(32)の文は、this knifeやthis penがcuts, writesのthemeではないので、上で見てきた空の再帰代名詞を目的語とする中間態とは別の構文となる。

- (32) a. This knife cuts well.  
b. This pen writes well.

構造は(33)のようなもので、主語のthis knifeは比喩的に拡張されたagent (あるいはcauser)であり、空の代名詞を目的語としていると考えられる。

- (33) this knife (top/subj/ag) [<sub>VP</sub> pro<sub>things</sub> cuts well]

実際、(32a), (32b)に対応するフランス語、ドイツ語などでも再帰代名詞は現れない。

- (34) a. Mon couteau coupe bien.  
b. Der Füller schreibt gut.

興味深いのは場所などの句が主語の文である。英語では普通前置詞があってもなくても容認されないが、対応するオランダ語では前置詞がない場合に文法的となる。

- (35) a. \*The chair sits (on) nicely.  
b. Die stoel zit (\*op) lekker.



(36) a. \*Such an atmosphere talks nicely (in).

b. Zo'n atmosfeer praat fijn (\*in). (Hoekstra and Roberts 1993: 184, attested)

しかし英語でも前置詞がない場合に容認可能となる例がいくつかある。

(37) a. ?This lake fishes well.

(吉村 1995: 255)

b. This music dances better than the other one.

(Van Oosten 1986: 84)

これらは次の構造で、前置詞が再帰代名詞とともに省略されたものと考えられる。

(38) a. This lake *pro<sub>arb</sub>* fishes well *in refl*

b. This music *pro<sub>arb</sub>* dances *to refl* better than the other one.

通常、前置詞も含めて、意味のある要素の省略は復元可能性の条件に違反するため容認されないはずであるが、(37)のように語彙の意味などにより、文全体の意味関係が推測できる場合には容認可能となるものと思われる。この点で関係していると思われるのはやはり左方転位の文である。

(39) a. (As for) the flat tire, John explained that there had been nails on the ground.

b. Restaurants, the situation's hopeless in Chapel Hill. (Rodman 1974: 446f.)

これらの例では普通の左方転位の文とは異なり、代名詞及び前置詞が現れていない。話題の名詞句は少々無理な意味解釈によって、コンマ以下の部分と結びつけられていると考えられる。(37)のような付加詞中間態は数は少ないにせよ、実際に存在し、これをNP移動や語彙規則で説明するのは難しいと思われる。これに対し、ここでのMergeと意味解釈による分析ではこれらの例を自然に説明することができる。

## 5. 結論

以上、英語の中間態構文は(17)のような構造を持つということを述べた。空の再帰代名詞が、英語に存在すること、それが中間態で目的語となっていること、中間態の文法的主語は話題の役割を持つが、動作主は*pro<sub>arb</sub>*であることを示し、NP移動分析と語彙規則分析の両方の問題が解決できること、中間態の状態性や付加詞中間態についても自然な説明ができることを述べた。

## 注

\* 準備段階及び発表の際に、奥聡、大野公裕、山田義裕、松本マズミ、三藤博、今泉志奈子の各氏をはじめ多くの方に貴重なご意見をいただいた。ここに感謝の意を表したい。なお、本研究は平成9年度札幌大学研究助成を受けている。

<sup>1</sup> Massam (1992)も中間態に空の再帰代名詞とnon-thematicな主語を仮定しているが、*tough*構文及び*recipe*構文との類似性を主張するもので、本稿の立場とは異なる。

<sup>2</sup> 主語の*this book*は、直接[Spec, T]にMergeされるが、*refl*から $\theta$ 役割を間接的に与えられるため完全解釈の原理に違反にしないと考える(cf. Chomsky (1995: 314-315))。

## References

- Ackema, P. and M. Schoorlemmer. 1995. Middles and nonmovement. *LI* 26: 173-197.
- Carrier, J. and J. Randall. 1992. The argument structure and syntactic structure of resultatives. *LI* 23: 173-234.
- Chomsky, N. 1995. *The minimalist program*. The MIT Press.
- Diesing, M. 1992. *Indefinites*. The MIT Press.
- Fagan, S. 1988. The English Middle. *LI* 19: 181-203.
- Fellbaum, C. 1989. On the 'reflexive middles' in English. *CLS* 25/1: 123-132.
- Fiengo, R. 1980. *Surface structure*. Harvard University Press.
- Fujita, K. 1994. Middle, ergative and passive in English. *MITWPL* 22: 71-90.
- Goldberg, A. 1991. A semantic account of resultatives. *Linguistic Analysis* 21: 66-96.
- Halliday, M. A. K. 1967. Notes on transitivity and theme in English, Part 1. *J. of Linguistics* 3: 37-81.
- Halliday, M. A. K. 1970. Language structure and language function. In *New horizons in linguistics 1*, ed. J. Lyons, 140-165. Penguin.
- Hoekstra, T. and I. Roberts. 1993. Middle construction in Dutch and English. In *Knowledge and language, vol. 2, Lexical and conceptual structure*, ed. E. Reuland and W. Abraham, 183-220. Kluwer.
- 今泉 志奈子. 1997. 「英語における副詞要素としての再帰代名詞」 *Kansai Linguistic Society* 17: 100-110.
- Jespersen, O. 1927. *A modern English grammar on historical principles: part III syntax*, George Allen & Unwin.
- Jones, M. 1996. *Foundations of French syntax*. Cambridge University Press.
- Keyser, S. and T. Roeper. 1984. On the middle and ergative constructions in English. *LI* 15: 381-416.
- Levin, B. 1993. *English verb classes and alternations*. The University of Chicago Press.
- Massam, D. 1992. Null objects and non-thematic subjects. *J. of Linguistics* 28: 115-137.
- Matsumoto, M. and K. Fujita. 1995. The English middle as an individual-level predicate. 『英文学研究』 72: 95-111.
- Quirk, R. et al. 1985. *A comprehensive grammar of the English language*. Longman.
- Roberts, I. 1987. *The representation of implicit and dethematized subjects*. Foris.
- Rodman, R. 1974. On left dislocation. *Papers in Linguistics* 7: 437-466.
- Ruwet, N. 1976. *Problems in French syntax: transformational-generative studies*. Longman.
- Stroik, T. 1992. Middles and movement. *LI* 23: 127-137.
- Van Oosten, J. 1986. *The nature of subjects, topics and agents*. Indiana Univ. Ling. Club.
- 吉村公宏. 1995. 『認知意味論の方法』 人文書院.